

史跡・今城塚古墳

— 平成11年度・規模確認調査 —



2000

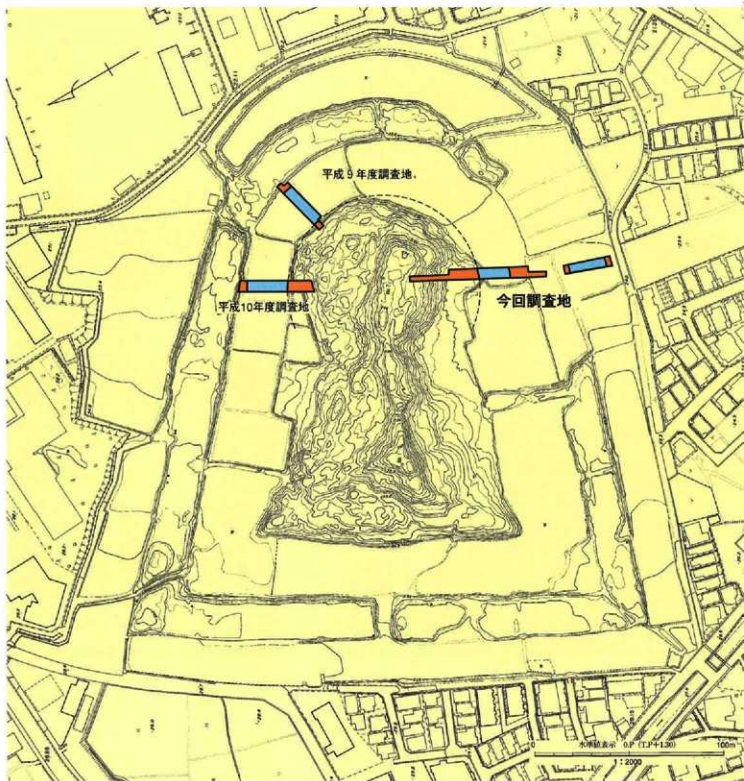
高槻市教育委員会

はじめに

今城塚古墳は、6世紀前半に築かれた淀川北岸で最大級の前方後円墳で、二重の濠をめぐらしています。「今城」の名は戦国時代に墳丘や濠を利用して砦とされたことに由来し、そのときの大規模な改変のために古墳本来の形状をとどめていません。このため、平成8年度には測量調査をおこない、古墳本来の規模は全長348m、全幅342m、墳丘長186m、後円部径100m、前方部幅148mと推定できるようになりました。

平成9年度からは今城塚古墳の保存整備に必要なデータを得るために規模確認調査を行っています。過去2回の調査では、後円部北側の墳丘及び内濠・内堤の状況が判明したほか、戦国時代の今城山城の築城時に大規模な土木工事を組織的に起こったことが明らかになっています。

今回の第3次調査は後円部南側の墳丘および内・外濠の遺存状況と後円部の直径を把握するために実施しました。



表紙 内堤からみた内濠（西南側から）

古墳について

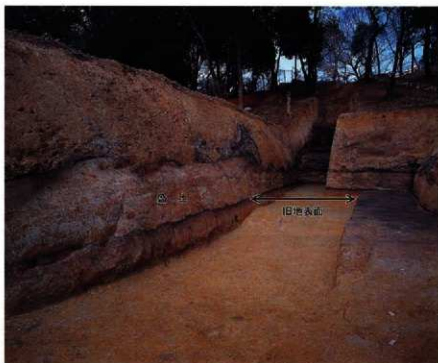
墳丘

後円部南側は戦国時代の城砦による大規模な改変を受けていましたが、古墳本来の盛土の状況と古墳時代の地表面をはじめ確認し、北から南へむかってわずかに傾斜する旧地表の上に一旦平坦面を形成しながら直接、墳丘を築いていたことがわかりました。盛土は径0.4m、厚さ0.1m前後の小土塊をていねいに積み上げたもので、非常に堅く締まっています。墳丘の下方はおもに黒色土、上方では黄灰色土をもちいて意図的につかい分けているようです。黒色土の化学分析では、人為的に炭化物を混和しているとみとめられました。盛土の強度を増す工夫もみられません。

調査区北端では墳丘上に南北3m、深さ0.6mほどの落ち込みがあり、土砂が流入・堆積していました。ここからは、細片となった石棺や埴輪、鐵・小札(よろいの一部)などの鉄製の武器・武具類、ガラス小玉が出土しました。



調査区全景（墳丘側から）



墳丘盛土と旧地表面



盛土の状況



上：杭と板材の出土状況
左：内濠全景（南側から）



基石の状況（墳丘側）

内濠

墳丘側と内堤側の斜面裾を確認しました。調査地点が後円部から前方部へと移行する位置にあたるため、墳丘側と内堤側の裾のラインは平行でなく、幅約5mの調査区東端部での深幅は18.4m、西端部では19.2mとなり、西側ほど広がっています。現地表面からの深さは2.2mを測り、底はほぼ平坦です。

濠の斜面角度は、墳丘側が26度、内堤側は27度でたちあがった後、葦石面では10度と緩くなっています。

層序は地上から耕作土、埋積土、堆積土（泥土層）となっており、これまでの調査と同じ状況です。1～1.2mの厚さの堆積土には円筒埴輪のほか、フングリやヒシ、倒木などの植物類がたくさん含まれていました。内堤裾付近の濠底では数本の杭を発見したほか、墳丘側では板状の木製品もみつかっています。

葦石

墳丘側・内堤側で確認しました。人頭大からひとかかもある川原石を斜面に据え、墳丘側にはより大きな石材を用いています。内堤側の大部分は崩落などで本来の位置をとめていませんが、墳丘側では据まわりの石列がゆるやかな弧を描くように並んでいました。これまで、3次におわたる調査結果から、葦石は崩落した石材の量から判断すると、墳丘斜面全面に葦かれていたとは考えられず、内濠兩岸の水際を巡っていたと思われる。



調査区 平面図・断面模式図



外濠と内堤（東側から）

外濠

外堀の調査は今回が初めてで、今城塚古墳の二重の濠の貴重な資料を得ることができました。濠は古墳の外堤ラインと平行に直線状にのびています。濠底はほぼ平坦に掘削され、濠底幅19.7m、地表からの深さ0.8mを測ります。濠の断面形は逆台形となり、その斜面角度は24～25度を測ります。

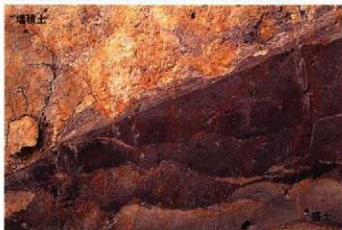
層序は地表から耕作土、埋積土、堆積土に大別できます。濠底の堆積土は厚さ0.3mありました。内濠の堆積土のように均質な泥土ではなく、粗い砂粒を含むことから当初より空濠だったことが判明し、二重の濠の実態にせまる主要な成果を得ました。

濠内からは埴輪のほか12世紀中頃の瓦器碗や火縄銃の鉄砲玉が出土しました。



外濠から出土した鉄砲玉
直径1.1cm 重さ6g

埋積土の滑層部：盛土（黒）の上を埋積土（黄）が滑っている

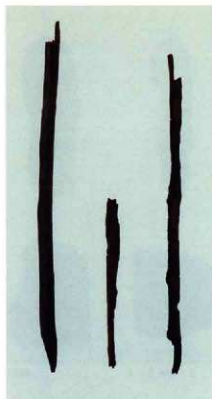


今城山城について

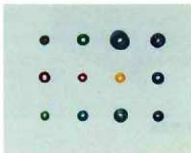
後円部北側の所見と同様に、築城時の状況が明らかになりました。

内濠では一辺2m前後の土塊を墳丘側から内堤側へ落とし込んでいました。いずれも衝撃や重みで割れたり、滑落した跡が各所にみられ、濠を一気に埋め立てた状況がうかがえます。これらの埋積土は内堤側に黒色土、墳丘側には黄灰色土が多く分布する傾向があります。

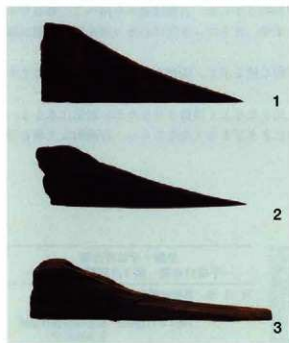
墳丘裾付近では墳丘を崩して内濠を埋め、さらに土塊をかき上げをして整地し、郭にしています。建物や欄などの城郭に関連する遺構はみつかっていませんでした。



上：板材の出土状況（内濠）
 左：内濠底から出土した杭 約 1/12
 右：墳丘から出土したガラス小玉約1/1



内濠から出土した板材 1, 2：約1/6 3：約1/8 4：約1/12



出土遺物について

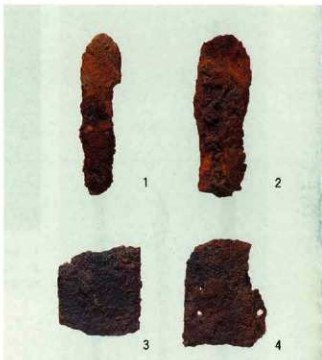
古墳に関わる遺物としては埴輪、木製品、石棺、鉄製品、ガラス小玉などがあります。埴輪は大部分を円筒埴輪が占め、ヘラ記号を記すものもありました。木製品には内濠から出土した杭と板材があります。杭は丸太材の枝を払い先端を尖らせたもので、第2次調査でみつかった杭打ち用の掛矢とともに古墳築造に用いたものと考えられます。墳丘では石棺片と鉄鎌・小札などの鉄製品や青・黄・緑色のガラス小玉がみつかっており、主体部の状況を知るうえで重要な資料となります。

城に関わる遺物としては、外濠の堆積土の最上面から出土した火縄銃の鉄砲玉があります。灰白色の径1.1cmの球形で鉛製、表面は風化しています。打撃痕がみられないことから実際に発射されたものではないようです。





円筒埴輪



約1/4 鉄製品 鏃1・2、小札3・4

約1/1

まとめ

第3次調査では、墳丘や古墳築造時の状況について新たなことが判明しました。古墳は北から南へごくゆるやかに傾斜する平坦地に小土塊を積み上げて築造されたことが想定できます。さらに、3次にわたり墳丘裾の位置が確認できたことで、後円部の直径は100mであったことがわかりました。

内濠は底の標高や斜面の傾斜などが過去2回の調査結果ともほぼ同じ値を示し、周到な設計のもとに高度な土木技術を駆使して築いたことがうかがえます。

今城山城の築城にあたっては、濠を一気に埋めるための巨大な土塊を効率よく移動させるために斜面に水をまいて土塊をすべらすなど、短期間で大規模な土木工事をおこなうためにさまざまな工夫をこらし、計画的な工事を行っていたことが明らかになりました。



史跡・今城塚古墳 一平成11年度 第3次規模確認調査一

所在地／高槻市郡家新町
史跡指定／1958年2月18日
1991年7月20日 新池埴輪製作遺跡を追加指定
指定面積／80,632㎡
アクセス／JR摂津富田駅から北へ1.5km、徒歩20分
または国駅から市バス奈佐原行き「福祉センター前」下車、徒歩3分

編集／高槻市教育委員会 文化財課
埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台5丁目21-1
TEL 0726-94-7562
発行／2000年10月20日
印刷／株式会社 日東印刷
TEL 0726-77-3711